

巻 頭 言

京都大学数理解析研究所

熊谷 隆

数学会のジャーナル (Journal of the Mathematical Society of Japan, 以下 JMSJ と略記) の編集委員長を務めて、2年余りになります。JMSJ の編集委員は、2名の編集委員長と16名の編集委員から成っており、この他4名の海外の委員がおられます。昨年の年初から、Edit Flow という電子編集システムを使い、投稿・査読等の手続きが全てネット上でできるようになりました。これに伴い、数学会事務局への負担を大幅に減らすことができるとともに、編集委員長と編集委員、査読者が直接やりとりをすることで査読に関する一連の行程がシンプルになり、時間も短縮できるようになりました。

編集委員長として JMSJ の編集に携わり、あらためて日本人は仕事が丁寧だと感じています。JMSJ の編集委員長をお受けする1年少し前まで、Stochastic Processes and Their Applications という確率論の雑誌の編集委員長を3年間務めたのですが、この時には編集委員の方の中に何人か、委員としての仕事を然るべきスピードでやって下さらない方や、慎重に検討せずに判断される方もおり、研究面の有能さと編集委員としての能力は別物であると身をもって知る事になりました。(もちろん、多くの編集委員はきちんと自らの責任を果たして下さいましたが。) 加えて出版社側の担当者も短い期間で代わるので、なかなか大変でした。JMSJ の編集委員の方々は、個人差はもちろんあるものの、皆さん担当された論文を丁寧に検討して下さいます。数学会事務局の担当者にも大変お世話になっています。編集上の問題が生じても速やかに対処して下さい、とても助かっています。

ジャーナルの査読のプロセスについて少し説明しますと、投稿された論文は、まず編集委員長に送られます。編集委員長は内容をチェックし、明らかに JMSJ のレベルに達していないものは reject し、それ以外のものを編集委員の中で専門分野に近い方に送り、担当エディターになってもらうよう依頼します。担当エディターは、査読に回すかすぐに reject するかについてより専門的な立場から判断し、査読に回す場合には査読者を選んで論文を詳しく検討してもらいます。その際、あまりに専門的な内容で数学全体の雑誌にふさわしくない論文については、reject して当該分野の専門誌への投稿を促す事もあります。査読者からのレポートが上がってききましたら、編集委員は accept, revise, reject の意見を編集委員長に伝え、編集委員長がその判断に

賛成する場合には編集委員会の判断として著者に連絡、異議がある場合には編集委員と議論を行います。(著者との対応は全て編集委員長が行い、担当エディターが誰であるかは著者には伝えられません。)このようにして、最終的に編集委員長と担当エディターが掲載を勧める状況に達した論文は、3ヶ月に一度の編集委員会で検討され、最終的な採否が決定されます。この最後のステップは国内ジャーナル独特のもので、一本一本の検討論文が出席している編集委員全員の目に触れ、英文の内容や論文のスタイルも含めて吟味されます。編集委員会で修正意見が出た論文は、著者に最終修正をしてもらい、晴れて **accept** されるという流れになります。

JMSJ の年間投稿数は、年によって多少のばらつきはあるものの電子編集システム導入前の8年間くらいはある程度一定でしたので、システムの導入で投稿数が増えることを期待したのですが、2016年の307本をピークにこれまでとあまり変わらない傾向にあります。今後も色々な方法で、JMSJ を宣伝する必要があると考えています。初めに述べましたように、比較的丁寧に査読・編集をしておりますので、数学会会員の皆様には良い論文の投稿先の一つとして是非 JMSJ をご検討頂き、海外のお知り合いの方々にもお勧め頂けるとありがたいです。

JMSJ の編集の話に関連して、雑誌の査読等について、最近思うことを書きます。ここ10年くらいでしょうか、世界的に数学者の書く論文の総数が大きく増えたせいか、きちんとした査読者を探すのがとても難しくなっています。私はいくつかの確率論関係の雑誌の編集委員を務めていますが、確率論のトップジャーナルと言われる雑誌でも、最近が多忙を理由に査読を断られることが増えています。査読の質も全般に少しずつ落ちており、読み方が雑あるいは査読者の素養不足のために、論文の主張の重要度を判断できていないことや、逆に先行結果の簡単な拡張に過ぎないのに有力な雑誌に掲載されるようなことが目に付くようになったと感じます。特に、学生や駆け出しの研究者が単著で書いた良い論文が、きちんと吟味されず短いレポートだけで **reject** されるという話をあちこちで聞きます。私が駆け出しの頃は、最終的な判定は厳しくても、もっと丁寧な査読が行われていたと思うのですが、何とも残念なことです。特に若い研究者にとっては、論文を執筆して **arXiv** に上げるだけではなく、その成果が関連分野研究者の目に留まるよう、国際研究集会等で発表するなどしてしっかりアピールすることが、益々重要になっていくのでしょうか。それはもちろん大事なことです。他方でもう少し大らかな雰囲気の中で幅広く数学と関わることが出来る環境を作り、若い研究者がその中で広い意味での数学の素養を深めることが、コミュニティの成熟のためには不可欠だと思います。